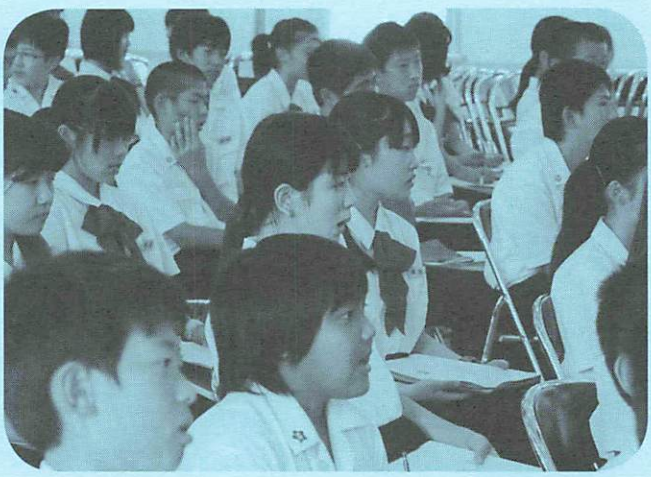
第Ⅲ部
研究の総括







第１章　学校評価

１　はじめに

今年次は，３か年研究の２年次として，「持続可能な社会の形成に向け，自らを活かす生徒の育成ーすべての生徒が伸びる学びの追求ー」の実現に向けて，①「育てる」から「育つ」への教師の指導観の転換と②自尊感情の醸成と３つの「きょうどう」精神を発揮させる学びの創造に学校全体として焦点を絞り，研究実践を進めてきた。そこで，学校評価のために行った教師による自己評価や生徒･保護者に行ったアンケート調査の結果などから今年次の研究及び実践の成果や課題を探りたい。

２　学校評価のための自己評価やアンケート調査から

(1)　教師による自己評価の結果から

資料１は，本校の教師による学校評価のために行った自己評価の結果である。これは，７月に教師18名が回答したものを集計した結果である。それぞれの評価項目の実施状況や達成（習得）状況の数値は，具体的な評価指標について，その実施状況や達成（習得）状況を80％以上を４，70％以上80％未満を３，60％以上70％未満を２，60％未満を１として自己評価したものの平均値を表している。評価指標は，本校の教育目標「自立と共生の力をもつ生徒の育成」の具現化を図るため，具体的な目標として，①意欲的な学習活動の推進，②主体的な生徒諸活動の推進，③道徳教育の充実　の三つの柱を立て，その中で実施状況や達成（習得）状況が判断できる具体的な目標を決め，その目標に対してさらに２～５の具体的な評価指標をつくったものである。

具体的な３つの目標は，

ア　すべての「個」が生きる学習指導法を研究するとともに，指導と評価の一体化を目指す目標分析と評価法の研究を行う。

イ　生徒一人一人に存在感をもたせる「場」の設定及び工夫を行う。

ウ　学びがいのある道徳の時間を通して豊かな心の教育を目指す。

である。

資料１より，上の目標アに対する評価指標①１から③２まで，3.0以上の評価がなされている。特に，「基礎・基本を確実に定着させるために学習指導を工夫することができたか。」と「学ぶ楽しさを味わわせるための学習指導を工夫することができたか。」という評価指標に対して，3.28という評価をしていることから，すべての生徒が伸びる学びのために，基礎・基本の定着と「育つ」ことを意識した学習指導の工夫が積極的に行われていることが見て取れる。

また，目標イに対する評価指標の中で④１「学校行事において生徒が自信と誇りをもち，継続して挑戦するための手立てを工夫することができたか。」については，3.39という最も高い評価がなされている。これは伝統ある学校行事への取組を特別活動や総合的な学習と関連させて，生徒それぞれの活躍の場をつくってきているこれまでの本校の取組に加え，今年次，本校の研究について，自尊感情の醸成と３つの「きょうどう」精神の育成を学校体制で研究推進していこうとしてきた成果であると考えられる。上記の目標のうち，アについての自己評価は，そのまま本校の研究についての自己評価として捉えることができるものだと考えられる。また，イについては，各教科の学習以外の諸活動についての「場」の設定や工夫を自己評価している。自尊感情の醸成と３つの「きょうどう」精神の育成を考えて実践しているという意味では，研究の成果が実践している教科・領域以外にも関連して表出してきていると考えることができる結果である。

以上のことから，今年次の各教師の実践において「育てる」から「育つ」への教師の指導観の転換は十分に図られていたと考えられる。

項　目	具体的な目標	具体的な評価指標		評価
1 意欲的な学習活動の推進	ア　すべての「個」が生きる学習指導法を研究するとともに，指導と評価の一体化を目指す目標分析と評価法の研究を行う。	①1	基礎・基本を確実に定着させるために学習指導を工夫することができたか。	3.28
		①2	生徒の探求心を高める手立てを意図的・計画的に実施することができたか。	3.06
		②	基礎・基本を活用し，多面的・多角的に考える場面や表現する場を計画的に実施することができたか。	3.22
		③1	学ぶ楽しさを味わわせるための学習指導を工夫することができたか。	3.28
		③2	授業の自己評価を行い，指導改善を工夫することができたか。	3.00
2 主体的な生徒諸活動の推進	イ　生徒一人一人に存在感をもたせる「場」の設定及び工夫を行う。	④1	学校行事において生徒が自信と誇りをもち，継続して挑戦するための手立てを工夫することができたか。	3.39
		④2	部活動において生徒が自信と誇りをもち継続して挑戦するための手立てを工夫することができたか。	3.06
		④3	委員会・係などの活動において生徒が自信と誇りをもち継続して挑戦するための手立てを工夫することができたか。	2.94
3 道徳教育の推進	ウ　学びがいのある道徳の時間を通して豊かな心の教育を目指す。	⑤	生徒が有用感を感じる道徳の時間の指導の工夫を行うことができたか。	2.61
		⑥	道徳的実践の指導を工夫して行うことができたか。	2.69

資料１　教師による自己評価の結果

(2)　保護者・生徒のアンケート結果から

資料２は，10月に保護者・生徒に実施した学校評価のためのアンケート調査の結果を集計したものである。本校で確かな学力の定着のために力を入れて取り組んでいる教育活動に対しての３つの質問項目について，保護者415名，生徒471名が回答したものである。評価の欄は，それぞれの質問に対して，４段階（４：そうだと思う，３：だいたいそうだと思う，２：あまりそうだとは思わない，１：まったく思わない，０：わからない）で評価してもらい，上段はその評価をした人数を，下段はその評価をした全体に対する割合を示している。保護者に対しては，教師による自己評価でも具体的な目標としていた①意欲的な学習活動の推進，②主体的な生徒諸活動の推進，③道徳教育の充実の三つの教育活動推進の柱とその具体的な方策，及び学校評価のためのアンケートの質問項目を年度当初に予め提示しておき，前期終了間近の10月に調査を行った。生徒に対しては，保護者への質問項目に対応させたものに加えて，前年度の学校評価のためのアンケート調査で質問した項目も加え，比較検討ができるようにした。

①基礎基本は身に付いていると思いますか。 (人)

	評価4	評価3	評価2	評価1	評価0
1年保護者	44	77	16	1	2
	31%	55%	11%	1%	1%
2年保護者	37	80	11	0	4
	28%	61%	8%	0%	3%
3年保護者	43	78	20	0	2
	30%	55%	14%	0%	1%
全校保護者	124	235	47	1	8
	30%	57%	11%	0%	2%

①私は，教科の基礎基本が身に付いている。 (人)

	評価4	評価3	評価2	評価1	評価0
1年生	42	92	19	1	1
	27%	59%	12%	1%	1%
2年生	30	100	21	3	3
	19%	64%	13%	2%	2%
3年生	30	98	28	2	1
	19%	62%	18%	1%	1%
全校生徒	102	290	68	6	5
	22%	62%	14%	1%	1%

②考える力，表現する力は身に付いていると思いますか。(人)

	評価4	評価3	評価2	評価1	評価0
1年保護者	47	77	15	1	0
	34%	55%	11%	1%	0%
2年保護者	35	81	14	0	2
	27%	61%	11%	0%	2%
3年保護者	48	76	16	0	3
	34%	53%	11%	0%	2%
全校保護者	130	234	45	1	5
	31%	56%	11%	0%	1%

②私は，考える力，表現する力が身に付いている。 (人)

	評価4	評価3	評価2	評価1	評価0
1年生	42	90	18	1	4
	27%	58%	12%	1%	3%
2年生	22	101	29	3	2
	14%	64%	18%	2%	1%
3年生	32	97	27	0	3
	20%	61%	17%	0%	2%
全校生徒	96	288	74	4	9
	20%	61%	16%	1%	2%

③学ぶ楽しさを実感していると思いますか。 (人)

	評価4	評価3	評価2	評価1	評価0
1年保護者	55	65	16	2	2
	39%	46%	11%	1%	1%
2年保護者	36	74	15	2	5
	27%	56%	11%	2%	4%
3年保護者	48	75	20	0	0
	34%	52%	14%	0%	0%
全校保護者	139	214	51	4	7
	33%	52%	12%	1%	2%

③私は，学ぶ楽しさを実感している。 (人)

	評価4	評価3	評価2	評価1	評価0
1年生	79	58	11	4	3
	51%	37%	7%	3%	2%
2年生	43	88	23	0	3
	27%	56%	15%	0%	2%
3年生	66	74	15	3	1
	42%	47%	9%	2%	1%
全校生徒	188	220	49	7	7
	40%	47%	10%	1%	1%

資料２　保護者・生徒対象の学校評価アンケートの結果

資料２を見ると，保護者・生徒ともに，評価が３以上である肯定的な評価をした人が，どの質問項目についても，80％を超えている。すべての生徒が伸びる学びを追究している本校の研究・実践は生徒や保護者から肯定的に捉えられており，今年次の各教科・領域での研究実践は効果を上げていると考えられる。

また，右の資料３は，次の

① 基礎基本が身に付いている

② 考える力・表現する力が身に付いている

③ 学ぶ楽しさを実感している

の３つの項目について，保護者，生徒のアンケートと教師の自己評価で４段階に評価された結果をそれぞれ平均し比較した表である。

		評価平均①	評価平均②	評価平均③
保護者アンケート		3.18	3.2	3.2
生徒アンケート		3.05	3.03	3.27
教師自己評価	学習指導の工夫	3.28		
	探求心を高める		3.06	
	考え，表現する場		3.22	
	学ぶ楽しさの工夫			3.28

資料３　保護者・生徒・教師の評価の比較

資料３より，教師の行っている学ぶ楽しさを味わわせるための学習指導の工夫は，保護者・生徒ともに高く評価していると分かる。基礎･基本の定着については，保護者や教師の評価に比べて，生徒の評価は低くなっている。保護者の学校評価アンケートの自由記述に「授業などは工夫されていると思うが我が子の様子を見ていると学力は全く身に付いているとは思えない」や「科目に苦手意識がある場合，どうにか乗り越えられる指導の工夫がほしい」などの記述があり，伸び悩

みや行き詰まりを感じている生徒が少なからずいることが評価に出てきていると考えられる。学習に対する自信を失っている生徒にも対応してすべての生徒が伸びる学びを実現するように，学習指導の工夫についてさらに研究を進めていかなければならないと考える。

(3) 全国学力・学力状況調査の結果から

平成26年４月に実施された全国学力・学習状況調査の生徒質問紙の質問に対する全国の生徒の回答の状況（全体に対する割合）と，平成26年10月に実施したアンケート調査の質問に対する本校生徒の回答の状況（全校生徒に対する割合）を比較したり分析したりして，今年次の成果と課題について考察する。全国学力･学習状況調査も本校のアンケート調査も４の評価は「そう思う」，３の評価は「どちらかといえばそう思う」として回答している。

「友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意ですか」という質問に対して，全国は４の評価が15.7%，３の評価が32.9%，本校は４の評価が18.5%，３の評価が41.8%，「友達に伝えたいことをうまく伝えることができますか」という質問に対して，全国は４の評価が22.3%，３の評価が47.9%，本校は４の評価が20.8%，３の評価が52.9%であった。これらのことから，３つの「きょうどう」精神を育てるために，言語活動や集団での学びを工夫してきたが，評価は全国と比べてわずかに上回っているものの，今年次の研究実践が十分な効果を上げているとまでは言えない。自尊感情の醸成に関しては，「自分にはよいところがあると思いますか」という質問に対して，全国は４の評価が24.5%，３の評価が42.8%，本校は４の評価が29.3%，３の評価が51.4%であり，全国に比べやや高い評価をしていることから，全体的には自尊感情の醸成が図られたと考えられる。しかし，同じ質問に対して否定的な評価をしている生徒が63名もいること，さらに28名の生徒が「分からない」と回答していることは問題点である。

３ おわりに

今年次の研究は，①「育てる」から「育つ」への教師の指導観の転換と②自尊感情の醸成と３つの「きょうどう」精神を発揮する学びに重点を置いて進めてきた。その結果は，教師の指導観の転換については，十分な進展がみられ，その学習指導の中では，３つの「きょうどう」精神を発揮させる様々な指導の工夫や取組を行い，いくつかの成果を得た。また，自尊感情の醸成も図ることができたと思われる。それは，「学級みんなで協力して何かをやり遂げ，うれしかったことがある」というアンケートに，「そう思う」という４の評価をした生徒が，全国学力・学習状況調査（平成26年４月実施）においては全国では58.4%であったのに対し，本校生徒は平成26年10月には77.1%を占めていたことにも現れている。しかし，自尊感情の醸成という面では，昨年次の課題であった自分の可能性やよさを見いだせていない生徒の存在が解消されていないことが課題として依然残っている。

全国学力・学習状況調査（平成26年４月実施）において「学校に行くのは楽しいと思いますか」という質問もされている。この質問に対して「そう思う」と答えた生徒は全国では46.5%で「どちらかといえばそう思う」と答えた生徒を合わせると82.7%であるが，本校の生徒は平成26年10月に実施したアンケートで同じ質問に対して「そう思う」が69.6%で「どちらかといえばそう思う」と答えた生徒を合わせると94.7%であった。昨年次と同様に本校の生徒のほとんどが「学校は楽しい」と感じていることは，前年度から今年度にかけての研究を含めての本校の教育活動が成果を上げていることを示している。今後は，２年間の成果と課題を踏まえて，すべての生徒が学校は楽しいと思いすべての生徒が伸びる学びを，学校の教育活動全体を通じてさらに追究していきたい。

第２章　２年次研究のまとめ

１　今年次の研究総括

今年次も昨年次と同様に，研究主題を具現化するアプローチを多様に展開する意図から，各教科領域及び各個人が研究テーマを設定し研究・実践をすすめた。資料１は，各教科領域において展開された研究実践の一部を，冒頭「基本構想」で述べた研究主題を具現化するための二つの柱，①「育てる」から「育つ」への教師の指導観の転換，②自尊感情の醸成と３つの「きょうどう」精神を発揮する学びの創造，に沿ってまとめたものである。なお，①・②はそれぞれ相互に関連し合いながら教育効果を上げていくものであるが，ここでは，各教科領域の研究実践を集約し，共通した成果等を見出すために分類した。

教科領域	研究主題の具現化に向けたアプローチ（一部） ①「育てる」から「育つ」の教師の指導観の転換 ②自尊感情の醸成と３つの「きょうどう」精神を発揮する学びの創造
国　語	①思考の深まりや広がりの過程，及び，自他の異同を明確に捉えさせる学習指導の工夫 ②他者の学習成果を活かし合う学習指導の工夫と他者との関わりについて振り返ることのできる場面の充実
社　会	①習得したことを活用し合って新たな学びを生み出す，問題解決的な学習における学習過程や学習形態等の工夫 ②各自の学習成果の可視化とそれを互いに活かし合う学習活動の充実
数　学	①学んだ数学的な見方や考え方を明確にさせ，活用させやすくする学習指導の工夫 ②多様な考えをつなぐ集団での学び合いの充実
理　科	①探求意欲を継続させる学習課題の設定や主体的な学びを引き出すための学習指導の工夫 ②関わり合いから学び合いへの学習の転換と生徒が成長を実感できる評価の工夫
音　楽	①学習した内容や技能を活用する教材選択や題材構成の工夫 ②生徒どうしの関わり方を中心に，自主的な活動が行える場の設定と自己評価場面の充実
美　術	①生徒自らが感覚を働かせることができる，視覚的アプローチを生かした学習展開 ②自分自身に向き合わせるとともに，高い評価意識で他者と関わり合うことのできる，鑑賞活動におけるコミュニケーション活動の充実
保健体育	①内発的動機付を高めるための教材・授業展開の工夫 ②総合的に運動有能感を高める授業づくり，及び，仲間とともに「できる喜び」や仲間への感謝の気持ちを感じさせる学習活動の展開
技　術	①多面的・多角的な視点から思考を深めることのできる，生活と社会を関連付ける題材の工夫と授業改善 ②考えや情報を整理し，共有情報から学び合わせるためのコンテンツマネージメントシステムの開発
家　庭	①他校種や社会人と連携した学習活動の実施 ②学習成果や学習感想を共有する場面の工夫
英　語	①生徒の主体性を引き出し，学習内容の真の理解を促進する学習指導方法の工夫 ②ペアや小集団で協力して学習の目的を達成したり，課題を解決したりする経験の積み重ね，及び，互いのよさを認め合う活動の充実
行く河	①レジリエンスを高める意思決定スキルの習得を図る学習，及び，生徒のニーズに基づくアサーショントレーニングや傾聴トレーニングの実施 ②共同体感覚を育む話合い活動，及び，シェアリング場面の工夫改善

資料１　各教科領域で展開された実践事例（一部）

これらを含め，各教科領域において多様な実践がなされた。これらの実践を重ねたことにより，自らを活かすことが，課題の解決，及び，よりよい集団（社会）の形成につながり，自己の成長につながる，との実感を多くの生徒にもたせることができた。このことは，「望ましい子ども像」に掲げた「○○しようとする生徒」を育成する上で大きな意味をもつ。それは，「自分を活かす」ことが，「自らの学び」や「他者の学び」にとって非常に大切であることを認識できるようになったからである。「自分を活かす」ことの意味や意義への自覚の高まりを生徒にもたらしたことは，ＥＳＤの目標に掲げられた価値観や行動の変革に資する成果であると言える。これらのことから，「自らを活かす」ことによって「自らが育つ」ことを重視した教育活動を展開することが，本校の研究主題を具現化する上での確かな実践であることを明確にすることができた。

また，各教科領域における研究実践例中の生徒の学習感想に多くあるように，自らが習得した知識や概念，技能等を引き出し，活用したことに対して，生徒は学ぶ楽しさを感じている。なおかつ，活用したことによって集団に貢献できたことを認知したとき，自尊感情が大いに醸成されるとともに，さらに学ぶ意欲が高まり，自らのもつ力を発揮している（しようとしている）状況も見取ることができた。このことから，生徒が「活用」することを促進させることが，「学ぶ楽しさ」を味わわせたり「確かな行動力が育つ」学びを展開したりするうえでは非常に重要な要素であることへの認識を私たちはさらに高め，今後の研究実践に活かしていきたいと考える。

２　３年次研究に向けて

国連が定めた「ESDの10年」は2014年が最終年である。しかし，未来を見据えて今の社会を見たとき，今後もESDの重要性は明らかである。なぜなら，現代社会における「持続可能性の危機であり人類の課題」とされるもののほとんどが，いろいろな要素が複雑に絡み合い，簡単には解決できないものばかりだからである。さらに，予測できない事態に対応できる資質や能力までも求められている。こうした状況から，2014年11月に行われたESD世界会議においても，これからのESD推進の方向性とそのアクションが様々議論され，「持続可能な社会」の実現に向け，教育の重要性が再認識されたところである。また，次期学習指導要領に向けて設置された「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」（2014年３月）にて，これまでの「知識中心」から「能力中心」のカリキュラムに方向転嫁する意図，及び，能力の具体としての「汎用的なスキル」（「自立的な問題解決」や「メタ認知」「意志や志」など）が示された。これらは教科を横断して育まれるものであると同時に，「教科ならではの見方や考え方」を教科固有の学習として取り上げるべきとの提言もなされている。以上を踏まえたとき，本年次取り組んだ「『育てる』から『育つ』の学び」「自尊感情の醸成と『きょうどう』精神を発揮する学び」を核にした実践研究を，さらに充実させなければならないと考える。例えば，「教科ならではの見方や考え方を確実に習得させる」とともに，生徒がそれらを活用し「自立的に問題解決」することを通して，「メタ認知」や「よりよい社会の形成に向けた意欲や志」などの「社会参画の土台となる資質や能力」を成長させる学習などである。

今後ますます，「汎用的スキルを育てるために，各教科等のフィールドにおいてどのような学習を展開すべきか」の議論が盛んになってくることが予想される。本校の研究実践の成果がその一助となるよう，「すべての生徒の自立と共生の力が育つ」学習指導の在り方をさらに追求し，その質の向上を図らなければならない。これを具現化するためには，どの教科領域においても「自立と共生の力」が確かに育ったのかどうかを効果的・効率的に見取る評価の在り方について課題が多く残されているため，目標と指導と評価の一体化をさらに図った教育実践を積み重ねていかなければならないと決意している。

お わ り に

３か年継続研究の２年次のまとめとして研究成果をこのような形で多くの皆様方のおかげをもちまして報告することができました。このことにまず厚く感謝申し上げたく存じます。

研究主題「持続可能な社会の形成に向け，自らを活かす生徒の育成～すべての生徒が伸びる学びの追求～」に基づき，各教科と「行く河」を研究実践の場として，自らを活かしきることのできる生徒を着地点として描き，研究に取り組みました。「３つのきょうどう（共同，協同，協働）の精神」を一人一人の生徒が存分に発揮する場を意図的に設け，これを研究方法の要にすえ，生徒たちを確実に育てること，いや，生徒たち自らが求めて育つことを目指しました。研究授業を重ね，生徒たち自らが求めているもの，生徒たちが欲していることを探ること。これが探究心をくすぐり，生徒自らを奮い立たせることとなります。これを存分に発揮する場として，「きょうどう」の場を次に意図的に設けます。ここでは，個々の思いの中に潜む共有できるものを，生徒たち自らの手でつくりあげていきます。この「きょうどう」の場こそ，生徒同士，生徒たちと教師が織り成すコミュニケーションを図る場です。言語を媒介とするなら言語活動充実の場ともなります。このコミュニケーション活動は，互いを尊重する意識，互いを認め合う意思の働きがなければ，決して成立しません。この活動を通して生徒たち自らが感得し，身に付けることができるものは，人間尊重の精神であり，自尊感情です。そして，共有できたものは，納得し，合意して創った合意形成物と申せましょう。それは，自ずと個々の胸の中にすとんと落ちていくことでしょう。この一連の学習活動においては，生徒自らが互いの力をいただきながら，まさに育つ場が確保されています。教師はよりよきコーディネーターとして，また，よりよき学習集団の一員として，また，優れた指導者として，絶妙なバランスを見極めながら生徒たちとかかわっていかなければなりません。口で申しますことは大変ですが，あえて私たちはこのことにチャレンジいたしました。そして，全員が一丸となり，太田校長と平松先生のリーダーシップ，ご指導の下，９教科と１領域で研究に取り組んだ軌跡が本小冊子でございます。

私たちの研究は，日々の地道な授業実践を大切にいたしました。１時間ごと，１単元ごとに，評価，改善，新たな工夫を繰り返し，互いに悩みを語り合いながら，こつこつと取り組みました。その中で共通に大切にしたことは，多様な関わりです。その一端を授業研究として，公開もいたしました。授業研究における指導案作成からまとめに至る過程の要所要所で，研究パートナーとしての大学の先生方，公立学校の先生方の適切なご指導，ご助言を数多く賜りました。示唆に富むご指導に対し心から感謝いたします。まだまだ拙いものではありますが，現代の教育課題や動向を精緻に踏まえた確かな実践，提案をさせていただきます。ご笑覧いただきました皆様に厳しくご指導を賜りたく存じます。頂戴いたしました至宝のご指導をもとに，本校の生徒たちがさらに成長する実践研究，モデルに値する研究となるよう，不断の努力を行うことを誓います。

これまで心温まるご指導を賜りました，愛媛県教育委員会様，松山市教育委員会様，各市町教育委員会様，愛媛県小中学校校長会様，愛媛県教育会様，愛媛県教育研究協議会様，各公立諸学校様に対し，甚深の謝意を改めて申し上げ，おわりのことばにかえさせていただきます。

平成27年２月

愛媛大学教育学部附属中学校　副校長　齊　藤　照　夫

研究アドバイザー

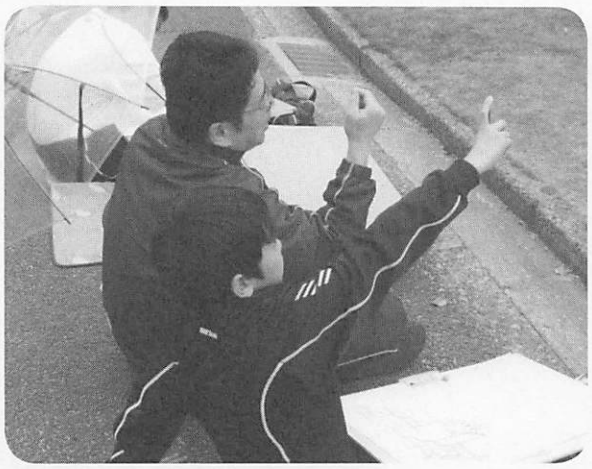
愛媛大学教育学部教授　　平松　義樹

研究同人及び愛媛大学研究パートナー

校　長　太田　佳光　　副校長　齊藤　照夫

教科領域	研　究　同　人	愛媛大学研究パートナー
国　　語	大上　航太・武田　香織 竹縄　隆子	三浦　和尚
社　　会	田中　寿佳・西田　剛志 宮本　真人	鴛原　　進・川岡　　勉・川瀬久美子 張　　貴民・中曽　久雄・福田　喜彦 森　　貴子・矢澤　知行
数　　学	赤松　結美・鶴本　直丈	河村　泰之・吉村　直道
理　　科	岡本　慎次・辻井　　修 森山由香里	大橋　淳史・熊谷　隆至・隅田　　学 中村　依子・日詰　雅博・向　　平和
音　　楽	来嶋　英生・遠藤　智保	井上　洋一・木村　勢津 楠　　俊明・松井　見麿（附属小学校）
美　　術	大川　博司	秋山　敏行・福井　一真
保健体育	池内　裕紀・坪内　道広	糸岡　夕里・日野　克博
技　　術	斧　　純司	大西　義浩・森　慎之助
家　　庭	大黒　智子	竹下　浩子
英　　語	河野　圭美・吉岡　　瞳	池野　　修
行く河	濵田眞基子・山口　京子	上田　敏子・富田　英司・日野　克博

（五十音順）









2014 愛媛大学教育学部附属中学校研究報告集　第46号

平成27年２月

発行者　愛媛大学教育学部
〒790-8577　松山市文京町３番
TEL 089-927-9371
愛媛大学教育学部附属中学校
〒790-0855　松山市持田町１丁目５－22
TEL 089-913-7841　FAX 089-913-7842

印刷所　株式会社　松栄印刷所
〒790-0003　松山市三番町７丁目９－２
TEL 089-941-3334　FAX 089-933-7911

表紙作品：青葉写生会　絵画（水彩）青葉大賞「希望の学び舎」　１年　清水　杏実
中表紙作品：美術部作品　絵画（ちぎり絵）「とある日の午後」　３年　金丸　怜未

